降臨節前主日（特定２９）　　エルサレムに迎えられる　　２０２４．１１．２４．

もうだいぶ前のことですが、福岡市美術館でエジプト展を見たことがあります。その時の一番の見ものは全長３７メートルになる、グリーンフィールド・パピルスという長い書物です。この中には「死者の書」という文書が絵と一緒に綴られています。

古代エジプトの人々は、死んだ後の再生、復活を信じていて、生きているうちから、その準備をしました。この世で正しい行いをしていれば、死んだあとも「イアルの野」という、まあ天国のようなところで、畑を耕し、神々とともに永遠に生きることがゆるされたからです。その「イアルの野」というところにも、ナイル川が流れているんだそうです。そして、来世では自分は働きたくないので、自分のかわりに働いてくれる召使を連れてゆきました。それで、死んだ王様の棺の中には、シャブティと呼ばれる人形の形をしたものがいくつも入れられていました。そして、この王様の棺の中とか、表面、ミイラを巻いた布などに、死者の書という呪文の言葉などが書かれています。それは、死んだ後にも、口がきけるようにするための呪文。また、王様が死んでから、死後の国である西の方に旅をすることになっていますが、その旅を邪魔して、王様を復活させまいとする、ヘビやワニなどの邪魔者を撃退するための呪文、審判を受ける時の、自分を弁護するように心臓に頼む呪文なども書かれているのです。

復活というのは、聖書では、今日の旧約聖書ダニエル書などが書かれた、紀元前２００年ごろから、そんな思想が出てきたのですが、エジプトでは、もっと古い時代から存在していたんですね。

しかし、このエジプト展でわかったことは、エジプトで元々復活できるのは、当初は王家の人々に限られていて、「イアルの野」と呼ばれるところは、ナイル川の流れる現在のエジプトを指していました。つまり、この世の身分制度や状況が、復活後も続く、という理解です。「死者の書」は、最初は王様たちの棺だけに書かれていました。そのうちに庶民のものにも書かれて、みんな死後も生命を得ることができる、という考えができてきましたが、基本的にはこの世のあり方を、引き継いでゆく、という考え方です。

しかし、聖書の教える復活は、エジプトの死者の書の復活とは違います。

その違いが、象徴的に出てくるのは、今日の福音書に出てくる、ロバの存在です。
イエス様は、エルサレムの東、オリーブ山の向こう側から、ロバに乗ってエルサレムに入られました。

今日の福音書には、ロバが連れてこられて、イエス様を乗せる仕事に使われるのですが、これは旧約聖書に約束されていることでした。マタイやヨハネによる福音書では、その言葉が引用されていますが、それは、旧約聖書の最後から２番目の書物。ゼカリヤ書の９章９節そして１０節と関連があるのです。
『9:9 娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。』
ここまでが、福音書に引用されるところです。イエス様が王としてロバに乗ってこられる話。シオンというのは、エルサレムの町のある丘の名前です。問題は次の１０節です。

『 9:10 わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。』

エフライムとは、北イスラエル王国の中心サマリヤを含む中心地域。エルサレムは、もちろん南ユダ王国の中心都市ですから、神様が北も南も戦車や軍馬を絶ち、平和をもたらす、という話です。

先週の福音書は、エルサレムの都が、外国人によって踏み荒らされることを予告した箇所でした。

実際、エルサレムの町は、エジプトを脱出したイスラエルの人々が住み着いてから、バビロニア、シリアなどの国々に支配され、福音書が書かれた頃はローマ帝国の支配下にありました。

これらの国々は、イスラエルを攻めるのに、戦車を使い、軍人は馬に乗ってやってきました。戦車や馬は、戦争の象徴です。それでは、ロバはどうでしょう？何となく、平和の象徴のような気はしますが。

ロバについて、聖書関連の辞書で調べると、

ろば　Ass
　「ろば」は俗に「うさぎ馬」と呼ばれているように，体は小さいが，耳の長いのが特徴。オリエント世界では，古くから荷を運ぶ動物として広く使用された。その原産地が「半荒れ野」性の山岳地であったために，粗食に耐え，足が丈夫であった。そのために山道の多い地方では，その特性が発揮された。

体が小さいのに、耳が長いということで「うさぎ馬」などと呼ばれたのでしょう。平地をさっそうと走る馬と違って、あまり格好のいい動物ではありません。しかし、エルサレムのような標高８００メートルの山岳地帯で、上り下りの多いところを重い荷物を背負って、粗食に耐えながら仕事する、努力家にたとえられるでしょう。ゼカリヤ書に紹介されているように、平和をもたらすもののようです。そして、このロバに乗ってくる人も、やはりそのような人物だと言いたいのでしょう。

エルサレムという山岳地帯が、ロバに相応しい働き場である、というだけでなく、外国の軍隊によって踏み荒らされた町に、平和をもたらす者として、ロバに乗ってこられることは相応しかったのです。人々を力でねじ伏せる、権力者として来られたのではありません。

イエス様がエルサレムへ入ってこのあと十字架に架けられる、ということは、ロバのように格好が悪いだけでなく、苦しい仕事にじっと耐えながら、自分の使命を果たすことに、つながっているように思えるのです。王様になるのではなく、奴隷になる、というより蔑まれる死刑囚として死んで行くことは、大変な覚悟が必要なことだったでしょう。

イエス様は、人々がイエス様を王様にしたい、という勢いがあったことを、よくご存知でした。５千人にパンを食べさせた時、人々が騒ぐのを拒否するかのように、山に祈るために退かれたことがありました。それは、人々の期待する、武力による王様。馬と戦車に乗る王様になるのはご自分の使命ではない、と感じられたからです。

しかし、イエス様は、高い山の上に弟子たち三人と登った時、人々の期待に応えるわけではないけれど、王としてエルサレムに入り、人々の贖いのために犠牲をささげる苦難の王となることを決心されました。

今日の福音書はマルコ１１章ですが、１０章には、イエス様の決心を表すこんな表現が出てきます。
◆イエス、三度自分の死と復活を予告する
32:一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。33:「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。34:異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

イエス様は、ロバに乗ってエルサレムに入り、何をしようとされたのでしょうか。十字架にかかるのが目的だったわけですが、それにはどんな意味があったのでしょうか？

イエス様は、カッコいい馬で駆け抜けるような王様になるのではなく、ロバと共に険しい、山あり谷ありの道を歩むことを選ばれた、ということではないでしょうか。小さな体に耳だけが長い。周りの人々からバカにされ、傷つけられながら生きている人々。そんな人の仲間となって、その人を決して孤独にさせない。それがイエス様の目指された神の国だったのです。

イスラエル民族が、あの豊かなエジプトで奴隷だったのを、モーセを用いて解放したように、今、戦車や馬によって踏みにじられているエルサレムの人々、あるいはイスラエル全体の人々の重荷を担って楽にしてやりたい、というのが目的だったと思うのです。

そのために、馬ではなくロバに乗って、オリーブ山を越えてエルサレムに入られたのでしょう。

今日の旧約、ダニエル書７章には、「日の老いたる者」という、天地創造の神様と一緒に「人の子」のような者が天の雲に乗って現れることが書かれています。これはイエス様が生まれる２００年も前の書物ですが、ここには明らかに、父なる神様から権威を授けられた「人の子」のことが語られています。

ユダヤ教は一神教と言われていますが、ここには明らかにもう一人の神様が来られることが語られていて、イエス様がご自分のことを「人の子」と言われるのは、ご自分が父なる神様から遣わされた子なる神であることを言い表された表現なのです。

このダニエル書があったからイエス様を神様とする支持者が相当数いたのでしょう。そしてその人の子は、人々の重荷を担う、ロバの子に乗った救い主としてエルサレムに入られたことを、一年の最後の日曜日に私たちは祝いたいと思います。